〈シンポジウム・コメント〉

# 環太平洋地域における日本語の地位*

真　鍋　一　史**

国立国語研究所の国際シンポジウム「環太平洋地域における日本語の地位」は2003年２月１日（土）、約100名の参加者を得て開催された。国立国語研究所は、1993年から毎年、世界の日本語研究者との交流をとおして広い視野に立つ日本語研究・日本語教育研究の発展に寄与することを目標に、さまざまな国際シンポジウムを開催してきており、今回の国際シンポジウムは第10回目のものとなった。

今回の国際シンポジウムでは、国際化の進展にともなって、もはや日本語が日本人だけのものではなくなり、世界の多くの人びとの共有財産となってきたことに鑑みて、とくにその傾向が顕著に現れている環太平洋地域の５か国――アメリカ合衆国、オーストラリア、インドネシア、中国、韓国――に焦点を合わせて、それぞれの国における日本語普及の現状と日本語教育の事情の報告がなされ、それにもとづいて広い角度から議論がたたかわされた。シンポジウムは前半、後半の２部構成となっており、前半は、半沢康（福島大学教育学部助教授）の司会のもと、菅井英明（国立国語研究所日本語教育部門研究員）の基調報告につづいて、リンゼー・アムソール・四倉（アメリカ・メリーランド州立大学アジア・東欧言語／文化学科助教授）、池田俊一（オーストラリア国立大学アジア研究学部助教授）、レア・サンティアル（インドネシア大学人文科学部日本研究学科長）、彭広陸（北京大学日本言語文化学部教授）、朴容九（韓国外国語大学校日本研究所責任研究員）、小林路義（鈴鹿国際大学国際学部教授）のプレゼンテーションがなされた。つづいて後半は、米田正人（国立国語研究所情報資料部門上席研究員）の司会により、コメンテーターの真鍋一史（関西学院大学社会学部教授）、ヨーゼフ・クライナー（ドイツ・ボン大学日本文化研究所長）を加えてパネルディスカッションが展開された。

さて、今回、ここに収録した小論は、このパネルディスカッションに先立ってなされた筆者によるシンポジウム・コメントに若干の加筆訂正を施したものである。

## １．日本語の地位という「問題の立て方」

日本語の地位という「問題の立て方」は、菅井英明氏の趣旨説明と米田正人氏の司会者の言葉のなかで明確に示された。このような「問題関心」にもとづいて、今回の国際シンポジウムが企画されたことを高く評価するとともに、心から敬意を表したいと思う。それは、これまで日本では、文化とか言語とかが、多文化主義、あるいは多言語主義といった文脈で議論されるとき、その議論がやや観念的になりがちであったと考えるからにほかならない。一例をあげるならば、初等、中等教育において世界の地理・歴史を教えるという場合、世界にはさまざまな国があるが、それぞれの国に割かれる「教科書」のページ数は決して同一ではない。かって日本の小学校・中学校の社会科の教科書においてどの国にどのくらいのページ数が割かれているかを、いわゆる「内容分析（content analysis）」――K. Krippendorff, 三上俊治ほか訳『メッセージ分析の技法』勁草書房、1989年などを参照されたい――の手法で捉える試みを行なったことがあるが、その結果、それぞれの国ごとにそのページ数にはかなりの開きがある

*キーワード：日本語普及、意図せざる結果、文化的価値
**関西学院大学社会学部教授

ことがわかった（真鍋一史「日本人の対外イメージ」『関西学院大学社会学部紀要』39号、1979年）。ところが、このような社会科教科書における国ごとのページ数の差異という問題について、多文化主義の立場からする本格的な議論はいまだなされていない。日本における多文化主義の議論がやや観念的とする根拠の一つがここにある。この点、言語という問題については、多言語主義の議論は、それぞれの言語の置かれた「リアリティ」に鋭く迫るさまざまな試み（たとえば井上史雄『日本語は生き残れるか』PHP 新書、2001年など）を踏まえて、すでにその議論は「観念的」であることを越えつつあるといえるかもしれない。そのことをしっかりと確認しておきたいとする今回の国際シンポジウムの企画者の米田正人、菅井英明両氏の趣旨は高く評価することができるのである。しかし、そこにも問題がないわけではない。そのような問題点の指摘がコメントの第２点である。

## ２．「問題の立て方」における問題点

「趣旨説明」においては、「言語はどれも対等である」「言語には地位がある」という命題（proposition）があげられている。これらの命題が取りあげられたことはきわめて重要である。その点は高く評価しなければならない。しかし、これらの命題をめぐる議論については、やはりつぎのような視座を区別しておくことが不可欠といえよう。それは「である（sein）＝科学」論と「べき（sollen）＝ヴィジョン」論の区別である。趣旨説明における議論は、「言語を習得する知能に人種による遺伝的な相違は見られない」という命題を出発点に置いている。この命題を例に、ここでの二つの視座の区別を説明したい。「人種偏見を持つべきではない」とする主張はヴィジョンである。これに対して「ある人種に偏見を持つ根拠の存在しないことを実証する」ことは科学である。そして、人種問題に関していえば、ヴィジョンは科学によって裏付けられたといえよう。そのことは、たとえばアメリカ文化人類学会の1961年11月の年次大会における決議文からも明らかであろう。それは「米国憲法によって保証されているいろいろの権利からいずれかの人種を除外するということを正当化しうる科学的に立証されたいかなる証拠も存在しない」というものである（B. Berelson and G. A. Steiner, 南博／社会行動研究所訳『行動科学事典』誠信書房、1966年、p.600）しかし、それにもかかわらず、相変わらず人種偏見は存在し続けている。

以上の「人種」についての事例から、ここで提示しようとする視座はもはや明らかであろう。「言語の地位」という問題についても、これと同じ線上で「ヴィジョン」と「科学」が区別されなければならない。「言語はどれも対等であるべきだ」という、いわば「実存の叫び」ともいうべき主張は、いうまでもなくヴィジョンである。これに対して、「対等かどうか」を実証的に明らかにしていく作業は科学である。

ところで、ここで強調しておきたいのは、この「科学」の作業においても、いくつかの異なる次元（あるいは側面）が区別されるということである。具体的にいうならば、たとえば「ラテン語は論理性においてきわめてすぐれた言語である」という言説（discourse）があるが、このような視点からなされた「言語学」の領域における実証的研究にはどのようなものがあるのであろうか。また、そのような研究の成果からするならば、さまざまな言語にはさまざまな次元――たとえば「語彙の量」「表現の豊かさ」「構造の論理性」などの――ごとにどのような順位（rank order）づけがなされるのであろうか。あるいはそのような順位づけは不可能なのであろうか。

つぎに、その言語によって造り出されてきたさまざまな文化遺産（cultural heritage）――たとえば「文学」「芸術」「学問」「技術」「思想」など――の面からする順位づけということは実証的に可能なのであろうかという問いも提起されるであろう。

さらに、以上の二つの側面も現実にはつぎの次元（側面）と深く関わり合っていて、それらはいったんは概念的に区別されるものの、そのような線にそって実証的研究を進めるというのは、じつはきわめて困難な作業であるようにも思われる。それは「社会的側面」からする言語の順位づけである。「言語使用者の数」「学習者の数」「辞

書・辞典の数」「国際機関の公用語かどうか」などがその例であり、「趣旨説明」で「日本語の地位」といういい方がなされる場合、言語のこのような側面での順位を意味しているように思われる。しかし、この側面も、さらに客観的現実（objective reality）」と「主観的現実（subjective reality）」の二つの側面に区別されなければならない（P. L. Berger and T. Luckman，山口節郎訳『日常世界の構成』新曜社、1977年）。たとえば、日本語の例でいえば、「日本語学習者数」というのが「客観的現実」であるのに対して、今回の『日本語観国際センサス』の質問項目「最も習いたい外国語は何か」で、「日本語」と回答した人の数、あるいは「今後、世界のコミュニケーションで何語が必要になると思うか」で、「日本語」と答えた人の数などは「主観的現実」ということができる。

さて、以上に述べてきたように、コメンテーターとしては、今回のシンポジウムの発題者のそれぞれの発言を、このような視座あるいは枠組みを用いて整理するとともに、そのような整理の作業にもとづいて、さらに議論を展開させていくことを提案したい。

## ３．日本語教育の現場と日本語普及の現実

今回の国際シンポジウムでは、環太平洋地域――アメリカ合衆国、オーストラリア、インドネシア、中国、韓国――における日本語教育をめぐるさまざまな「事実の報告」がなされた。コメンテーターとしてとくに関心を持ったのは、そのような教育の現場をとり囲む社会の側の変化ということである。それはアニメ、コミック、ゲーム・ソフト、ドラマ、ポップ・ミュージック、ファッションなどハーバード大学学長ナイ氏の造語でいえば「ソフト・パワー」における日本語の充満という現象である。このような報告にコメンテーターがとくに関心を持ったのは、コメンテーター自身、同様の仮説を立てたことがあるからである。それは、海外における日本語の「顕現（salience）化」現象めぐる「大衆化仮説」ともいうべきものであり、この点について、つぎのように書いたことがある。

「日本語がエリートによる外交交渉とか学問研究とかの狭い領域を越えて、広く海外の大衆とどのような領域で出逢うかというと、それはやはりマーケティングの領域にほかならない。まず日本語で書かれた『商品取扱説明書』という事例がある。また、たとえば中国の例でいえば、一般の人びとの日常生活のなかでの日本語との接点は、多くの場合、交通の要所やビルの屋上などの広告塔であり、日本の商品の品質のよさを訴求する店頭広告であり、あるいは日本の観光客用の日本語表記などである。さらに、たとえば韓国の例でいえば、相変わらず日本語も含めて日本文化の進出に対する強い警戒感がありながら、驚くなかれ大衆紙である『スポーツ紙』には常設の『日本語会話』の欄がある。このように、すでに一般大衆のレベルでは日本語との接触に雪崩現象が起きているのである」（真鍋一史「外国における日本語――日本語の国際化を考える指標――」『日本語学』Vol. 13，1994年，p. 42）。

こうして、経済のグローバル化にともなう日本語の進出、「ソフト・パワー」への日本語の浸透という現象が進んできているという事実はもはや否定できない。それが、環太平洋の国ぐにおいて、いわば「日本語環境」とでも呼ぶべき状況を確実に作り出している。心理学でいう「図と地」のアイディアを借用するならば、それが多くの人びとにとって、すぐに「図」になるということはないにしても、すでにして「地」にはなっているであろうし、それが長期にわたる場合は日本語能力とまではいわないにしても、少なくとも日本語識別能力を「培養（cultivate）」――この用語は、G. Gerbner らの研究グループの「培養分析」に由来する。その基本的なアイディアは、「現代社会にあって人びとはマス・コミュニケーションにさらされており、それも選択の余地もなく、絶えず同じ内容メッセージに繰り返しさらされており、それによって人びとの間に、共通の現実感覚や社会イメージや価値観が形成されている」というものである（真鍋一史『広告の社会学［増補版］』日経広告研究所、1994年）――することにはなるであろう。そして、そのことは、「日本語教育」という問題、ひいては「日本語の地位」という課題とどうつながってくるのであろうか。こ

れは、今回のシンポジウムの最も重要な論点の一つといわなければならない。

さて、以上のような論点をめぐって議論を展開していく場合の、コメンテーターの視座はつぎのような点にある。それは、社会学の用語の援用にもとづく「意図した結果⇔意図せざる結果」という視座である。すでに述べた、経済のグローバル化にともなう日本語の進出という現象については、コメンテーターがそのまとめ役をつとめた国立国語研究所と日経広告研究所の共同プロジェクト「海外マス・メディア広告における日本語研究」によって検証された。そこでは、①日本商品が日本で売られているのと同じ形態で輸出され、商品名が日本語のままで海外の店頭に並ぶという事例、②日本商品とともに日本語で書かれた「商品取扱説明書」が海外に出ていくという事例、③日本語登載のままで輸出される日本製コンピュータ、日本語の出てくるテレビ・ゲームの事例、などが報告されている（真鍋一史「海外マス・メディア広告における日本語使用の実態と人びとの日本広告をめぐる意識（上）（下）」『日経広告研究所報』188号、189号、1999年、2000年）。このような事例では、日本商品は日本語の「乗り物」としての役割を果たしているのであり、日本商品が海外に輸出されるにともなって日本語も海外に広がっていくのである。しかし、いうまでもなく、このような事態は商品の輸出国である日本にとっては「意図せざる結果」というものである。日本商品の輸出が、海外への「日本語」の浸透をねらってなされているとはいえないからである。

海外への日本語浸透のもう一つの側面である「ソフト・パワー」における日本語という事例も、じつはこの経済のグローバル化という現象と深く関連していると考えられる。このような現象については、さらに「文化帝国主義」という視座から議論を進めていくこともできるであろう（真鍋一史『広告の社会学［増補版］』日経広告研究所、1994年）。

しかし、ここでは、以上の二つの型の日本語の海外浸透の現象がいずれも「意図せざる結果」というべきものであるという点が確認できれば、それで十分である。そしてこの点を確認したうえで、つぎにこのような日本語の海外への浸透という現象のまさに対極にある、海外における「日本語教育」という問題に移ることになる。現実社会――そして「ソフト・パワー」――における日本語の浸透という現象、このような「日本語をめぐる教育環境」の変化は、「日本語教育」にとってどのような意味を持っているのであろうか。今回のシンポジウムの報告からは、そのポジティヴな面と同時にネガティヴな面も感じ取れた。この点について議論を深めていくのも一つの方向であろう。ただ、ここでは、このような議論の方向とはまったく別の方向をとりたい。それこそが、コメンテーターの「原問題」ともいうべきものにほかならないからである。それは、「日本語教育」の成果という場合、その焦点は一般に「意図した結果」というところに置かれるということである。いうまでもなく、「教育」という人間活動においても「意図せざる結果」という側面は考えられる。しかし、ここでのポイントは、日本語の普及ということが「日本語教育」の「意図」であることは否定できないということであり、それにもかかわらず、その日本語普及ということを、少なくともその量的広がりという次元で捉える限り、それは「日本語教育」という「意図した結果」によるよりも、これまで述べてきたように「意図せざる結果」によってもたらされていることのほうが大きいといえるのではなかろうかということである。日本語教育の実践だけでは、日本語はここまで世界に広がることはなかったのではなかろうか。これが、コメンテーターの偽らざる実感である。そうだとするならば、このように量的側面についてのインディケーターズで捉えるかぎり、世界――今回は「環太平洋地域」ということであるが――における「日本語の地位」に対する貢献は、「意図した結果」にくらべて「意図せざる結果」のほうではるかに大きいといわざるをえないのではなかろうか。しかし、それは「日本語教育の現場」から考えれば、いかにも「むなしい」。この「むなしさ」はどう越えられるであろうか。それはきわめて大きな課題といわなければならない。

## 4．今後のあるべき方向

最後に、海外――ここではとくに環太平洋の国

ぐにということであるが——への日本語の普及という「社会現象」をめぐって、今後のあるべき姿についても考えおきたい。ここでもコメンテーターの視座はつぎの二つの点にある。

一つは、経済のグローバル化にともなう「意図せざる結果」としての海外への日本語の普及現象について、その「意図せざる」ところを再認識し、「文化を大切にする」という視点から、このような点にもっと配慮をし、さらに必要に応じてそれを「意図した」ものにしていくということも、今後のあるべき姿についての重要な課題の一つとなってくるではあろうということである。この点については、さまざまな具体的な事例を取りあげて詳細に検討していくことが必要であろう。ここでは一つだけ例をあげる。コメンテーターは、海外の国際空港で何度か係官から手荷物についての日本語で書かれた注意書きを見せられた経験がある。ところが、その日本語は必ずといっていいほどいつも「おかしな」日本語であった。それぞれの国、あるいは都市のいわば表玄関ともいうべき空港での日本語のレベルがこの程度のものなのである。これは、日本語という言語だけの問題ではない。たとえば日本文化についても、ときには中国文化や韓国・朝鮮文化と混同されたり、あるいは間違って理解されたりして、「おかしな」日本文化が日本の文化として外国に紹介されたり、浸透したりしている。このような状況のなかで、日本が外国に対して、改めて「ほんもの（の日本・日本文化・日本語）」を知ってもらおうとする姿勢を示すとともに、そのための方策を具体的に打ち出していくことは、「文化の時代」「ポスト・モダンの時代」「アイデンティティの時代」（R. Inglehart「ポスト・モダンの価値観の出現」『＜国際シンポジウム＞現代における価値観の変容』日本経済新聞（夕刊）1999年１月28日）、におけるきわめて重要な課題の一つといわなければならない。そして、世界おけるに日本語教育はこのような点において大きな貢献をすることができると考えるのである。このような方策は広い意味での「言語政策」に含まれるものといえるかもしれない。確かに、これまで日本で実施されてきたさまざまな「言葉に関する世論調査」では、「日本人は言葉については政策的なものをのぞんでいない」という傾向が見られるとされている（『世界の言語問題３』国立国語研究所、1997年２月、p. 13）。——この点については、一方で戦時中に植民地支配のなかでなされてきた日本の言語政策についてのある種の「うしろめたさ」の気持ちと、他方で言葉の変化はあるがままにしておきたいというある種の「自然主義」の考え方がかかわっているものと考えられる。前者については、川村湊『海を渡った日本語』青土社、1994年、などきわめて示唆的な研究が蓄積されてきたことを記しておかなければならない。また、後者については、ある言語が世界の国ぐにに広がることと、その言語についての「寛容性（tolerance）」ということには深い関連性がありそうだという仮説がかかわってくる。英語については、すでに、Indian English, African English, Asian English などさまざまな変種が生まれつつあるといえる。同じ線上で、日本語についてもそのような変種の日本語が生まれ、それらがそれなりに市民権を獲得することができるとするならば、日本語は世界の国ぐにさらに普及していくであろうという議論も成り立つであろう。——しかし、それにもかかわらず、海外への日本語の普及がこれほど広がってきた事実と、さらにそれが「意図せざる結果」としてもたらされてきたという事実に鑑みて、これも「文化を大切にする」という視点から、日本語の普及について「あるべき姿」を提案することには、やはり意味があるといわなければならないのである。

もう一つは、日本語の「文化的価値」の再認識と再確認の提案ということである。繰り返しになるが、日本語の世界の国ぐにへの普及という現象は、経済のグローバル化にともなう「意図せざる結果」という側面が大きかったというのがコメンテーターの観察である。そこで、世界における日本語の「あるべき姿」に向けてのコメンテーターの一つの提案がその「文化的価値」への意図的な（「意図せざる」ではなく）注目ということなのである。それは、いうまでもなく、日本語という言語が大きくいえば、「人類の共有財産」の一つであるという認識のもとに、そのように固有であるとともに、普遍的でもある文化を大切にしていきたい、いかなければならないという強い志向性に

よって支えられたものである。ここでは、言語の価値を「経済的価値」と「文化的価値」に区別して議論を進めてきたが、じつはこの点については、すでにF. クルマス教授のつぎのような興味深い分析がある。「言語の商品性は、外国語習得あるいは外国語教育の分野で最も明瞭に現れる。一つの言語の市場価値に影響を与える要因としては、さまざまな種類のもの、つまり政治的なもの、文化的なもの、しかしとりわけ経済的な種類のものがある。ここ10年間の日本語の相場の上昇は、その文化価値はこの間明らかに変わっていないのに、ほとんど日本円の相場上昇と同じくらい顕著である。日本語学習者の数がここ10年で世界的に見て4倍になったのは、日本がすべての大陸の多くの国ぐににとって重要な通商相手となった事実を直接に反映するものである」(Florian Coulmasu, 諏訪功ほか訳『言葉の経済学』大修館書店、1993年、p. 94)。

ここで、クルマス教授は、日本語の文化的価値にはここ10年間で変化がないとしている。しかしこの点についても、分析的にいえば、「新しい文化的価値が創造されるという側面」と、そのような「文化的価値についての集合的認識が広がるという側面」がさらに区別されなければならない。コメンテーターは、前者の側面については、すぐに具体的な提案を示すだけ準備はないが、少なくとも後者の側面については、つぎのような事例を再認識するという、この会場での共通体験こそがそれに当たるのではなかろうかと思う。それは、中国のいわゆる漢文の読み方におけるリジッドな規則とくらべた場合の日本語の「自由自在さ」ということで、一例として、鎌倉時代、曹洞宗の開祖となった道元が中国の経典を読み解いたさいの「自由自在さ」ということがあげられる。梅原猛氏によれば、道元は中国の経典を読む場合、漢文の読みかたのルールに反するような返り点・送り仮名をつけ、まさに自由自在にそれを読み解いた。『正法眼蔵』にはそのような事例が随所に見られるという。しかし、それは決して単なる誤読ではなかった。むしろその誤読ともいうべき「自由自在さ」が道元の独創的な仏教哲学を生み出すこととなった。同じ線上で、仏法を求めて渡宋した道元は師如浄から教えを受けるが、そこで師の「心塵脱落」という言葉を「身心脱落」と聞き違える。「心塵脱落」は、心の塵が落ちるということで、禅の思想からすればごく普通の考え方である。ところが「身心脱落」はいわば「自己が小さな自我を離れ、宇宙の実在と同一化したことを感じる」という神秘的体験を表現した言葉である。梅原猛はつぎのように書いている。

「『身心脱落』と聞き違えることによって、道元は悟りの眼を開いた。そしてかれの以後の思索は、すべてこの『身心脱落』という思想を中心とするのである。もしこれが誤解であるならば、まことに偉大な、独創的誤解が起こったということである。そしてこの偉大な誤解は、その後の日本の仏教史を左右することになるのである」(梅原猛『仏教の思想（下)』, 角川書店、1980年)。

ここで、コメンテーターの視座はもはや明らかであろう。道元が独創的な仏教思想を創造した契機の一つとして、日本語の「自由自在さ」ということがかかわっていたのではなかろうかというのがそれである。

もう一つ例をあげるならば、宮沢賢治の「月天子」と題する詩がある。それはつぎのようなものである。

「もしそれ人とは
　人のからだのことであると
　さういふならば誤りであるやうに
　さりとて
　人はからだと心であるといふならば
　これも誤りであるやうに
　さりとて人は心であるといふならば
　また誤りであるやうに」

いうまでもなく、ここにはギリシャ的な心身二元論とはまったく別の考え方が示されている。そして、そこにも日本語の「自由自在さ」がかかわっているといえないであろうか。

こうして、日本語の生み出してきた大きな文化遺産について思いを馳せるならば、日本語は今日においても世界の新しい思想を創造するということにおいて大きな貢献をする可能性を持ち続けているといわなければならない。いかにして新しい文化遺産を創造するか。これこそが「日本語の地位」にかかわる最も重要な要因となると考えるのである。

# The Position of Japanese Language in the Pacific Rim

## ABSTRACT

The International Symposium entitled “The Position of Japanese Language in the Pacific Rim” was organized by, and was held at the National Institute for Japanese Language on the 1st of September, 2003, with around 100 participants.

The coordinators, speakers and commentators of this symposium were as follows:

〈Coordinators〉
Masato Yoneda (The National Institute for Japanese Language, Japan)
Yasushi Hanzawa (Fukushima University, Japan)

〈Speakers〉
Hideaki Sugai (The National Institute for Japanese Language, Japan)
Lindsay Amthor Yotsukura (University of Maryland, USA)
Shunichi Ikeda (The Australian National University, Australia)
Lea Santiar (University of Indonesia, Indonesia)
Peng Guang Lu (University of Beijing, China)
Park Yong Koo (Korean University of Foreign Languages, Korea)
Michiyoshi Kobayashi (Suzuka International University, Japan)

〈Commentators〉
Kazufumi Manabe (Kwansei Gakuin University, Japan)
Josef Kreiner (Bonn University, Germany)

This paper is based on the comments I presented at this occasion. The comments are composed of four parts.

1. The first part deals with the way to construct the problem in discussing the position of Japanese language in the Pacific Rim. There are many ways of discussing this problem. In discussing this problem we are often idealistic, and our opinions tend to be unempirical. We need to be more realistic and empirical to explore this problem.

2. The second part describes the points of constructing this problem. (1) A distinction should be made between “vision” and “science.” (2) Various dimensions and indicators to measure the position of Japanese language should be developed.

3. The third part discusses the fact of diffusion of Japanese language abroad, particularly in so-called “mass culture.” I characterize these phenomena as “unintended consequences” using the terminology of Robert K. Merton.

4. The last part suggests the future prospect of the position of Japanese language. Here I propose an idea of the enhancement of the “cultural value” of Japanese language.

**Key Words:** the diffusion of Japanese language abroad, unexpected consequences, cultural value